性悪継母に逆らった伯爵家の三女は、魔界に売られて四天王の妻になり溺愛される

体験版

性悪継母に逆らった伯爵家の三女は、魔界に売られて四天王の妻になり溺愛される

体験版

目次

登場キャラクター……4ページ
第1章　魔界のオークション……6ページ
第2章　四天王の館……37ページ
第3章　淫獄の魔女……82ページ
第4章　魔王の視察……114ページ
第5章　天覧性技会……143ページ
あとがき……171ページ
作品紹介……172ページ

体験版

登場キャラクター

■ リーリア

主人公（あなた）。ファゼット伯爵家の三女。身長は百五十センチメートル台。正義感が強く、言いたいことを言う性格。貴族のたしなみとして魔法を学んでおり、動物に乗り移る魔法が使える。小さすぎる動物や、大きすぎる動物には使えない。性悪の継母マゼリアと衝突して、魔界のオークションに売られてしまう。

体験版

■　ダンテ

魔界の四天王の一人。土の四天王。身長は三メートル強で頑強な体。魔族には珍しく、冷静で落ち着いた性格をしている。独身。

魔王から「四天王は一人ずつ人間の妻を持つように」と命令される。悩んだ末に、魔界のオークションに行き、人間の女（主人公）を落札して妻にする。

魔王の無理難題に、よく振り回される。

体験版

第1章　魔界のオークション

体験版

「さあて、お次は銅貨一枚で魔界に売られてきた、人間の貴族の生娘です。
頭からかぶりついて食べるもよし、煮込んでスープの食材にするのもよし、はたまた檻に入れて飼育するもよし、ピンで留めて人間採集箱に飾るもよし、さまざまな用途で使用できること請け合いの一品でございます」
山羊頭のオークショニアーが、高らかに告げる。
無数の尖塔の下に設けられた高い天井、悪魔の姿が描かれたステンドグラス、歪んだ真珠を思わせる奇怪な壁面装飾。オークションハウスは熱気にあふれていた。
会場にいるのは、いずれも人ではない者たちだ。獣面の戦士、多面体の頭部の魔術師、蒼白痩身の魔界の紳士。彼らは目を血

体験版

走らせ、牙をむき、歓声を上げている。
黄金と宝石で飾られた商品台の上に、私は裸で立っていた。
金の髪、白い肌、青い目、私はファゼット伯爵家の三女リーリアとして生まれ、神々の加護のもとに成長してきた。しかし、私の運命は大きく変転した。身分と服をはぎとられ、ただの肉として魔界の住人たちの前に引きずり出されている。
私の人生もここまでか。運命を受け入れる気はなかったが、ここからどうにかできる方法を私は知らなかった。どうにかして道を開こうとして、周囲の魔族たちを観察する。なにか打てる手はないかと考える。
「金貨百枚！」
よく通る声が会場に響いた。入札者たちが声の場所に視線を

体験版

向け、一様に驚きの声を上げる。
会場の端に一人の男が座っていた。
身長は、人間の男の一・五倍以上。腕の筋肉は、人の胴ほどもある。肩から首のラインは岩石のように盛り上がっている。脚は巨木も蹴り倒せそうな力強さだ。一目で武人と分かる姿の男は、目深にフードをかぶっていた。
私は会場の声をひろう。自分の生死に関わる情報があるかもしれない。
会場の魔族たちが驚いている理由は二つあった。一つは法外な値付けである。銅貨数枚程度の食肉動物に、金貨百枚を払うという異常さ。もう一つは入札者の素性である。
顔を隠しているが、その声から誰なのか気づいた者たちがい

体験版

る。
――ダンテではないか。
そうした声が聞こえる。誰だろう。私は聞き耳を立てて、男が何者なのか知ろうとする。
――魔界の四天王の一人、土の四天王ダンテ。
魔族たちの大物が、なぜか私を、あり得ない高額で競り落とそうとしている。
あるいは命を落とさずに済むのではないか。私は淡い期待を抱く。
金貨百枚で買った女を、その夜に食べるとは思えない。少なくとも数週間は生かすのではないか。
山羊頭のオークショニアーがハンマーを打ち鳴らした。落札

体験版

が決定して会場が興奮で包まれる。
なぜ、彼が来たのか？
なぜ、あの女を買ったのか？
いったい何のために？
ゴシップが好きなのは、人間だけではないようだ。魔界の住人たちも一様に「話題」という甘美な果実を楽しむようだ。
会場の奥から小さな部屋ほどの檻が運びこまれて、私はその中に移された。
このまま檻ごと引き渡されるのだろう。会場の奥の倉庫に移された私は、落札者がやって来るのを静かに待った。
辺りは暗い。照明はない。高所にいくつかある空気取りの窓だけが光を招き入れている。

体験版

重々しい音がして扉が開いた。オークションハウスの従業員たちに連れられて、先ほどの落札者が入ってきた。

「おまえたちは下がれ」

巨獣を思わせる低い声が響く。従業員たちは頭を下げて扉から消えた。

私は改めて男の姿を見る。人間の女の背丈に比べて二倍ぐらいはある。体重は十倍ぐらいあるかもしれない。体はゴムまりのような筋肉に覆われている。素肌の上に黒紗の装束をまとっている。顔を隠しているフードは金襴のようだ。

私は男を値踏みする。男が私に金貨百枚の値を付けたのなら、こちらからも値を測ってよいだろう。

私が観察していると、重々しい声が響いてきた。

体験版

「名は何という？」
「リーリア・ファゼットです、ダンテ様」
顔は見えないが、男は驚いた様子を見せた。
「俺のことを知っているのか？」
「知りません。四天王の一人、土の四天王であることしか」
今度は男は動かない。驚きを意思の力で抑えこんでいるのが分かった。
「後学のために一つお聞かせください。なぜ私を金貨百枚で買ったのですか？」
私が胸を張って尋ねると、壁が震えるような笑い声が倉庫に響いた。
「面白い女だ。やはり、俺の目に狂いはなかったようだ」

体験版

「問いには、答えていただけるのでしょうか？」
男は笑いを止めて、こちらに注意を向けてきた。
「おまえに金貨百枚の価値はない。金貨百枚で買ったという事実を周囲に喧伝したかっただけだ」
「私を購入したことに、意味を持たせたかったということですか？」
「そうだ」
なるほど。私自身ではなく、人間の女を買うということに金貨百枚の意味を持たせたのだ。納得がいったが、次の疑問が湧いてきた。
「それでは、なぜ私を選んだのですか？　先ほどの口振りから、誰を買うかは事前に決めていなかったのですよね」

体験版

このオークションハウスに連れてこられてから、得られるだけの情報は集めた。
今日、私と同時に競りにかけられた人間の女は十人以上いた。
その中で私を選んだのはなぜか。
「気に入ったからだよ」
「なにを気に入ったのですか？」
「そういうところだ」
「分かりません。理由を教えていただきたいです」
ふたたび落雷のような笑い声が倉庫に響く。
「おまえは人にも似ず、魔族にも似ていない」
「どういうことですか？」
会話に付き合ってくれるのならば可能な限り情報を引き出し

体験版

たい。生きるために必要なカードは多い方がよい。
「臆さぬところ、媚びぬところ、それでいて愚昧ではなく、生きるために策を弄するところ」
私は無言で、魔界の四天王の言葉と動きを読み取ろうとする。
「おまえは気づいているか？　競売の台に立ったときに初めてしたことを。
観察だよ。会場中の入札者を心の天秤に載せて、自らの生に役立つかを見極めようとした。だからこそ、俺はおまえを選んだのだ」
男は饒舌に語った。多くの情報を引き出せた。男の思考、興味、そこから導き出される行動原理。得られた手札で、どんな手を打てるか考える。

体験版

「私をどうしたいのですか？」
生を繋ぐための手を考えながら問いをぶつける。
「俺の妻になり、子を孕んでもらう」
一瞬、頭が真っ白になる。想定外のことを言われて理解が追いつかなかった。
「人間の女を、妻にですか？」
「そうだ。俺は急遽、人間の女を妻に迎えなくてはならなくなった。そして子を孕ませて産ませなくてはならなくなった。だが、この手のことには疎くてな。ほとほと困り果てた。
それに、ただ妻を迎えればよいわけでもなかった。四天王としての体面も保たなければならなかった。俺には妻がいない。一人目の妻には、相応の者を迎えなければならない。

体験版

俺は一計を案じて、泥の中から玉をひろうことにした。正確に言うならば、周囲にそう思わせることにした。そして、この会場に来たというわけだ」

私は、フードで顔を隠した巨躯の男を見上げる。

魔族と人のあいだに子供が生まれることは知っている。魔族が侵攻したあと、強姦の末に半魔族が誕生することは有名だ。問題は、この見上げるばかりの男と性交ができるかだ。

目の前の魔族の男は、自分の二倍は身長がある。そしてこの、あふれるほどの筋肉だ。ペニスが私の胴体ほどあってもおかしくない。もしそうならば、貫かれた瞬間に私は死ぬだろう。

「どうした、魔族の妻になるのは嫌か？」

「いえ、ダンテ様の性器を私の体に入れて、果たして私は生き

体験版

ていられるだろうかと考えておりました」
「人の体は、それほどもろいか？」
「はい。布を裂くがごとく、簡単に破れます」
「ふむ、助言のとおりということか」
「どなた様の、どのようなご助言でしょうか？」
交友関係、組織、家庭、知りたい情報はいくらでもある。
「俺の配下の男夢魔だ。今回の一件を滞りなく進めるために、館に招いて直属の配下に加えた」
インキュバスを顧問にして、人間の女に子を産ませようとしているのか。
そうした行動が急に必要になったということは、立場が上のものに命じられたのだろう。四天王よりも上の立場の者となれ

体験版

ば、おのずと限られる。
「魔王様の命でしょうか？」
「口が軽い者は、長生きできぬぞ」
フードの下から、冷たい刃のような視線が投げかけられた。踏みこみすぎたか。片膝を突き、頭を垂れる。自分が従順なことを示して寛恕を請うた。
「心配しなくても殺しはせぬ。まだやるべきことを成していないからな」
頭を垂れたまま指示を待つ。
「四つん這いになり、尻をこちらに近づけろ」
ここで性交するのか？　周囲に人がいないとはいえ、いつ誰が入ってくるかも分からない倉庫だ。

体験版

いや、そもそも魔族にとって、性交は隠すものではないのだろう。悪魔崇拝者が乱交を好むように、交わる様子をたがいに見せ合うのかもしれない。

私は言われたとおり、鉄柵のすぐそばで背を向けて四つん這いになる。妻というのは言葉の綾で、実態は子を孕ませるための性奴隷にすぎないのかもしれない。

「んっ！」

急に刺激を受けて体が反応した。股のあいだを太い指で触られた。ちらりと後ろを見ると、柵の隙間から指を入れて女性器の上で指を滑らせている。指の太さは、人間の男性器が勃起したほどもありそうだった。

ダンテは懐から、香水瓶を思わせる小瓶を取り出した。ダン

体験版

テは小瓶の中身を指に振りかけ、私の女性器の周りをゆっくりとなでていく。

なにを塗ったのだ？

疑問に思った直後、下腹部が熱くなり、じわりと濡れた。脳の働きが鈍くなり、心地よさが心を支配する。雲母を削るように剥がれ落ちそうになる意識を、必死に保ちながら考える。

媚薬のたぐいか？　話には聞いたことがあるが、本物を見たことはない。

「案ずるな。肉を柔らかくする魔法薬だ。キャスバに作らせた」

「キャスバとは、どなたですか？」

「ほう、まだ意識を保っているか。肉だけでなく、脳も柔らかくすると言っていたのだがな。キャスバは、配下に加えた男夢

体験版

魔の名だ。おまえの世話役になる予定だ」
ダンテは、服の中から勃起した男性器を出す。サイズは人間の男の腕ほどだ。
自分の胴ほどの太さはなかった。そのことに安堵する。赤子が通ることを考えれば、腕一本は不可能な太さではない。しかし、一度も開いたことのない穴だ。無事で済むとは到底思えなかった。
檻の向こうから、指で腰をつかまれる。そして股間にペニスの先端を押しつけられた。触れたところは熱湯のように熱かった。
果たして破れずに入るのだろうか。杭のようなペニスが、ゆっくりと押し込まれる。抵抗があるかと思ったが、肉が広がり、

体験版

先端がじわりと中に入ってきた。
緊張で呼吸が荒くなる。魔法薬のせいで痛みは感じない。あるいは破瓜の傷みが発生しているのかもしれない。しかし、脳が崩れたプリンのようになっているせいで無視できている。
「耐えろ」
一言いわれて奥までねじこまれた。
内臓が左右に押しやられ、胃を突き上げられて嘔吐する。四つん這いになったまま自分の下腹部を見た。まるで瓶でも突っこまれているように盛り上がっている。
ふつうなら裂けている。巨根を受け入れられているのは魔法薬のおかげだろう。
「根元までは入らぬか」

体験版

まだ全部入っていなかったのか。体をガクガクと震わせながら、意識が飛ぶのを抑える。

「あぁぁぁっ」

自分の口から漏れた喘ぎ声に驚いた。苦痛が快感に置き換わっている。膣の痛みも、内臓の軋みも、喉奥からの逆流も、全てが喜びの刺激になっている。

「顔がとろけているな」

どんな顔になっているのか分からない。顔の筋肉が弛緩している。目の端に涙が浮かんでいる。口からはよだれと胃液を垂れ流している。全身が汗で濡れて、股間は愛液を多量に分泌している。

「ふだん聡明な者の痴態ほど、そそるものはない」

体験版

やはりこの男は魔族なのだ。魔族の流儀で妻を犯しているのだ。媚薬、拷問、改造、あらゆる方法を駆使して、私の性を蹂躙するつもりなのだ。

「受け入れろ、そして変われ」

「ああああああああああああああああああああああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ」

激しく突かれ、そのたびに悲鳴とも嬌声ともつかぬ声を上げる。肉の袋で男性器をしごくように、腰をつかまれて粗雑にあつかわれる。

胃の中はすでに空になり、なにも出ない。汗もすぐに搾り取られてしまうだろう。

早く終わってくれ。理性がそう願っているのに、体はもっと

体験版

快楽をあたえてくれと欲している。
壊される。
意識が消失しそうになった瞬間、下半身にマグマのような熱を感じた。引き裂かれたか。はじめはそう思ったが違った。精が放出されたのだ。
初めての挿入、初めての射精、全てが初体験だったために、肉体の感覚と起きていることの関係が分からなかった。
いや、分からないのは経験していないからではない。
異常な状況、魔法薬による肉体変化、正しい判断ができるわけがない。そう自分のことを慰めた。
腰から指が離れて、ペニスが引き抜かれた。穴が開いたまま、白い塊がどろりと漏れる。体を支えることができずに、そのま

体験版

ま床に倒れこんだ。先ほどまで圧迫されていた肺が、懸命に空気を取りこもうとしている。

「生きているようだな。俺の目に狂いはなかった。これから、俺の妻に相応しい体に生まれ変わらせてやる」

ダンテは口笛を吹いた。

倉庫の奥で大きな翼が広げられた。人を片脚で抱えられる巨大な鳥――ロック鳥だ。その横には標準よりはるかに大きな、鷲の上半身に獅子の下半身のグリフォンがいた。

「搬出口を開けよ」

倉庫の一角に向けて叫ぶと、壁が開いて大きな出口が作られた。鬼のような魔族が数人がかりで動かさないといけない金属製の扉だ。

体験版

ロック鳥が羽ばたき、檻の上に止まった。
ダンテはグリフォンにまたがり、腹に蹴りを入れる。グリフォンが先導して、ロック鳥があとを追う。私は檻の底で膣の穴を広げたまま脱力していた。
風が全身に叩きつけられる。急激に寒くなり、自分が裸であることを思い出す。
このままでは凍死する。なんとかしなければと思い、前を進むダンテに助けを求める。
駄目だ。風が強すぎて声が届かない。
どれぐらいの時間飛行するのか分からない。早急に手を打たなければ自身の命の灯が消えてしまう。
自分の持っているカードはなにか。魔法。魔族に比べれば微

体験版

々たる力だが、貴族のたしなみとして魔法を習っていたので使うことができる。

修得しているのは小動物への憑依魔法だ。ただし、小さすぎる動物や大きすぎる動物には乗り移れない。

顔を上げて周囲を見渡す。

鳥がいればと思ったが周囲にはいない。巨大なロック鳥と、大柄なグリフォンが飛んでいるのだから当然だ。思慮のある鳥なら近づく愚は犯さないだろう。

それならば限界を超えるしかない。

ロック鳥よりもグリフォンの方が小さい。それでも大きな熊ほどの体躯だ。自分のこれまでの成功例より、はるかに大きな動物になる。

体験版

寒さに震えながら前方のグリフォンをにらむ。
体内の魔力を全てしぼり出して、感覚を共有しようとする。自分の魔力を消費しきった瞬間に魔力量が増大した。これまで経験したことがない現象に驚きながら、グリフォンの精神を支配する。
視界が変わる。大空を睥睨する視点になる。
背中にはダンテが乗っている。私はグリフォンを支配して地上へと向かわせる。
ダンテはグリフォンの腹を何度か蹴って従わせようとする。しかし私の憑依の方が強い。眼下の森に着地して、動きを停止した。
私を運ぶロック鳥も、グリフォンのあとを追った。私の肉体

体験版

が囚われている檻をぶら下げたロック鳥は、地上に降下した。
私は安心して憑依を解いた。
ダンテはグリフォンの背から下りた。そして、いぶかしげに檻の中にいる私の近くまで来た。
「これは、どういうことだ？」
「人間を裸で空輸すれば凍死します」
「なんと、そこまでか弱き生き物だったか。さて、おまえはなにをしたのだ？」
興味深げにダンテは尋ねてくる。
「動物への憑依です。本当は、小動物にしか効かない魔法なのですが、途中で魔力量が跳ね上がり成功しました」
ダンテは嬉しそうに笑い声を上げた。

体験版

「魔力なら、たっぷりとおまえの腹の中にあるではないか」
どういうことだと思い、自分の腹に手を当てる。
「なるほど、魔界の四天王の精ですね」
「そういうことだ。ますます、おまえのことを気に入った。金貨百枚は捨てるつもりで使ったのだが、価値はあったかもしれぬ」
「それでは、その価値ある人間の女を殺さずに運ぶために、服をあたえてください」
私が求めると、ダンテは自らの頭にかぶっているフードをはぎとった。
「おまえの体を覆うには、これぐらいのサイズがよいだろう。風を防ぐ役に立てろ」

体験版

渡されたフードは頭から胸ぐらいまであり、人間のローブほどのサイズがあった。
陽の光の下にさらされたダンテの顔に、私は意識を吸い寄せられる。
四天王という要職とは思えないほど、若く秀麗な顔が、筋肉で武装した体の上に乗っていた。人の世界で、この顔を持つならば、数多の女たちを虜にするだろうという美貌だった。
檻の隙間からフードを押し入れたあと、ダンテは怪訝な表情をした。
「どうした？」
「いえ、体が大きすぎることを除けば、ダンテ様は私にとって好ましいお方だと思った次第です」

体験版

「そうか。それはよかった。女が寄ってこぬ顔でな。おかげで独り身を続けていた」
「喜んで、あなた様の妻になりましょう」
「人間は、顔で相手を選ぶのか？」
気に障ったかもしれない。素早く思考を巡らせて、魔族が納得しそうな言葉を紡ぎだす。
「傷一つないお顔ということは、それだけ戦場で強者だったということでしょう」
「ふむ。おまえのそういうところは、俺の好みだ」
策謀は瞬時にばれた。しかし、策を巡らせたことは間違いではなかったようだ。
ダンテは短い呪文を唱える。地面の土が集まり、檻の周囲を

体験版

覆った。
「大空の風は、人には厳しいのだろう。大地の力で守ってやろう」
「ありがとうございます」
「俺の館へと向かう」
ふたたびグリフォンとロック鳥が空へと舞う。土で囲まれた檻もふわりと浮いた。
こうして私は魔界の四天王の妻になった。そして彼の住む館へと旅立った。

体験版

第2章　四天王の館

体験版

土壁で覆われた檻に衝撃が加わり、地上に着いたことが分かった。
ダンテが呪文を唱え、檻を覆っていた土が剥がれ落ちる。長い旅だったが、ようやく周囲を見渡せるようになった。
魔界らしい葉の少ない灰色の森が見える。今いる場所は、その森を出た先だ。目の前には翼を広げたような石造りの館の玄関があった。
「これが俺の館だ」
壁には黒大理石が使用されている。扉は鉄でできている。贅をこらしているが人間の館とは違う。重厚で陰鬱な姿は、魔族趣味といったところだろうか。
ダンテが檻の扉を開けてくれた。足下には鋭い岩が無数にあ

体験版

る。裸足で歩くことをためらわれた。
「どうした、出ないのか？」
「靴がありませんので、そのまま出ては、足を傷だらけにしてしまいます」
「本当に、人はもろいのだな」
気がつかなかったという様子をダンテは見せる。
玄関の扉が開いて、黒ずくめの装束の者たちが何人か出てきた。角や牙をそなえた魔族らしい姿の者が多い。その中に一人だけ、瀟洒な装いの涼しげな容貌の優男が混ざっていた。
「キャスバ！」
ダンテに呼ばれて優男が出てきた。
彼が、ダンテが言っていた男夢魔か。人間の女が好みそうな

体験版

容姿や振る舞いをしている。
「人間のことは分からぬ。必要なものを手配しろ。妻を部屋に案内し、一通り準備が整ったら俺を呼べ。俺は執務室にいる」
「分かりました」
ダンテは、出迎えた魔族たちを引きつれて館の中へと消えていった。
「キャスバさんとお呼びすればいいですか？」
上下関係が分からないために尋ねる。
「キャスバでいいですよ。私はあなたに仕えるように命じられていますから。それに、あなたは貴族でしょう。見れば分かります。なぜ、魔界のオークションに出品されていたかは分かりかねますが」

体験版

「身の上は、あなたに話すべきなのか、ダンテ様に話すべきなのか分かりません」
「ダンテ様に語られた方がよいでしょう。求められればですが。あの方は武人ですから、女性が、くどくどと自分のことを話すのを好まないと思います」
「私も同意見です」
真面目に言うと、キャスバはくすりと笑みを浮かべた。なるほど、この笑みで数多の人間の女を籠絡してきてのか。
キャスバはひざまずき、すっと足下に靴を置いた。
「ダンテ様のことですから、裸のまま連れてくると思っていたのですが、身を包むものは、お与えになったようですね」
靴だけでなく服も用意していたのだろう。

体験版

なるほど、四天王の一人が配下に加えたのも分かると感心した。

「服は、凍死しないために必要だと私が伝えました。裸のまま空に連れていかれましたので」

私が靴をはきながら言うと、キャスバは驚いた顔をした。そして、値踏みするようにこちらを見上げてきた。

「飛行中に声は届かないですよね？」

「ええ、だからグリフォンを地上に下ろしました。憑依して向きを変えたのです。魔力はダンテ様の精を使いました」

キャスバは、人の振る舞いをやめて、ゲラゲラと悪魔的に笑いはじめた。私はその様子を無視して、彼の態度が戻るのを待った。

体験版

「いえ、すみません。感情をたかぶらせてしまいました。ダンテ様がいきなり妻と呼ぶわけです。あなた様の胆力、機転を、大変好ましいものとして受け取ったのでしょう。

分かりました。不肖キャスバ、あなた様のことを、ダンテ様好みの最高の女に、仕立て上げてみせます」

キャスバは女好きのする笑みを浮かべる。しかし、その表情の奥底に怪しい陰があった。

私は忘れていない。オークションハウスで使われた魔法薬は、今目の前にいる優男が作ったものだ。

人間の女を熟知して、その肉体と精神を変化させる術を知り尽くした男。表面上はともかく、決して心を許してはいけない相手だ。

体験版

尖った石が多くある地面を歩き、扉まで来た。
館の中は広かった。高価な岩石をふんだんに使った内装は、鏡のように磨き上げられており光を反射していた。私が暮らしてきたファゼット家の邸宅をはるかにしのぐ広さと豪華さを持っていた。
「キャスバ、部屋に案内してください」
「分かりました、奥方様」
巨躯の魔族用の廊下を歩き、一つの部屋に案内された。
ふたたび鉄製の扉だ。人間の世界で、木を素材に使うように、魔族の世界では鉄を多く用いるのだろう。
自分では開け閉めできないかもしれない。まあ、逃げる気はないのだが。

体験版

キャスバが扉を開けてくれた。柔らかい色調の壁紙。ふかふかの布団を敷いたベッド。茶菓を楽しむのにちょうどよい机と椅子。

部屋には、人間世界の貴族の部屋と変わらぬような、内装と調度品が用意されていた。

「どのような方が来るか分かりませんでしたので、それなりの身分の方が満足する部屋をしつらえておきました。方々から取り寄せましたので、それほど統一感がないのはご容赦ください」

「いえ」

様式や年代は統一されていて配置も申し分ない。これ以上を望めば、一級の職人に発注したり、工房を統一したりといった、金に糸目をつけない内容になってしまう。私は、キャスバが持

体験版

つ人間世界の知識の確かさに、内心でうなった。
「奥方様、まずは旅塵を落とされますか」
「そうですね。この部屋には、浴室や洗面所はありますか？」
「ええ。人間用のものを一式取りそろえています」
「それから、私のことはリーリアと呼んでください。その方が呼ばれ慣れていますから」
「分かりました、リーリア様」
私は浴室に案内されて、使い方を説明された。私が住んでいた地域とは異なる様式だったが、すぐに理解できた。
ダンテにもらったフードを脱いでお湯をかぶる。全身の筋肉が弛緩する。石鹸もあり、汚れを落とす。皮膚が呼吸をはじめた気がした。全身の汚れを念入りに落としたあと浴槽に入った。

体験版

「ふあああぁっ」
気持ちのよさに思わず声が出る。この境遇に落ちて、初めて一息吐いた。
「不幸中の幸いというか、食肉にされなかったのは助かったわ。魔界の四天王の妻というのは想定外の境遇だけど」
私は頭をかいて事の発端を思い浮かべる。
私たちの母である伯爵夫人が亡くなり、父は後妻を娶った。その後妻が性悪で、前妻の子供たちを排除しようとした。彼女は私たち姉妹や弟をいじめて精神を壊そうとしてきた。
だから私は面と向かって非難した。その結果、拉致されて魔界に売られて、服を奪われてオークションの商品にされてしまったわけだ。

体験版

姉や妹、弟たちは無事だろうか。自分の身はともかくとして、それだけが気がかりだった。

浴室の扉が開いた。キャスバが入ってきた。なぜ入ってくるんだ？　あまりにも自然に入ってきたので、自分の裸を隠すでもなく、呆然としてしまった。

「お湯加減はいかがですか？」

「ええ、ちょうどよいです」

「ダンテ様に確認してきました。魔法薬を使い、交合をなされたと。しかし、体のサイズが合わずに、かなりの苦労をかけたとおっしゃっていました」

私は浴槽の中で丸くなり、なるべく体を隠そうとした。

「少しお体を改造いたしましょう。ダンテ様の陰茎を容易く受

体験版

け入れられる方が、リーリア様のお体にも負担が少ないでしょうから」

なにをする気なのだ。警戒して少しでも遠ざかろうとする。しかし、浴槽の中にいるので、わずかしか下がることができなかった。

「どうも、警戒されているようですね。私の容姿は、たいていの女性であれば心を奪われるものなのですが。そして、魅惑の魔法も効いていない。

魔法の修行を積んでおられるようですね。しかし、魔族については疎いようです。早く魔界の流儀に馴染んだ方がよいです。固い頭では駄目ですから」

体を動かそうとして動けないことに気づいた。なにか魔法を

体験版

かけられた。そんな気配は感じなかったのに。
「リーリア様が入っている浴槽のお湯は、私が改造したスライムです。ふだんは水のような状態で、飼い主の私が『固い』と言うと硬化します」
固い頭では駄目――、このフレーズが合図だったのか。
「抵抗があるでしょうから、動きを封じさせてもらいました。しかし危害を加えるわけではありません。これから、リーリア様の命を守るための処置をおこないます」
キャスバは浴槽まで歩いてきて私の前に立った。そして服のあいだから長いペニスを取り出した。
「なっ、なにをする気なの？」
体を動かせないせいで逃げることができない。すでにダンテ

体験版

の妻となったのに、不貞をするわけにはいかないと思った。
「ここでは人間の倫理は捨ててください。そもそも私は、自分の精を持っておりません。体内に蓄えた液体を注入する、そうした魔族なのです。
私たち夢魔の一族は、女夢魔が搾り取った精液を、男夢魔が女性に注入します。男夢魔は、頭と手足を持った注射器のようなものなのです。
今私の体の中には、調整した魔法薬が入っています。その薬液をあなたの体内に注入します。このペニスを使うのが、最も効率的な方法なのです。これからおこなうことは、ダンテ様も了承済みです」
本当なのだろうか。ダンテは、私の体を、キャスバに弄ばせ

体験版

ようとしているのだろうか。
キャスバが湯船のお湯に触れると、液体状のスライムが飴細工のように形状を変えた。
私の姿勢は変えられる。私は両手を縛られ、足を固定され、お尻を浴槽の外に出した状態になる。私はキャスバに性器をさらした姿になった。
「魔法薬はまだ効いているようですね。前戯はいらないようです」
股間を指で触れられると、一気に愛液が噴き出した。ダンテと交わったときよりも、激しい快感が全身を貫いている。
「初めての感覚だったようですね。ダンテ様は奥手で、こうしたことには不慣れです。魔法薬の使い方も説明したのですが、

体験版

効果を十二分に発揮してはいなかったのでしょう」
全身を激しい快感が巡っている。水槽の波紋が何度も壁で跳ね返るように、皮膚と肉のあいだで刺激が反射し続けている。
「そしてリーリア様も、性交には疎い人生を歩まれてきたようですね。
この体は、まだ性的に開発されていません。気脈の流れを整えて、体の各所と脳を直結させて、刺激の伝達量と速度を増大させます」
キャスバは、私の性器やへそ、乳首や首筋などを細い指で触れていく。そのたびに魔力を流しこんで、体内に魔法の刻印を埋めこんでいく。
「安心してください。害のあるものではありません。人間の世

体験版

界でも似たようなことをおこなっています。貴族が性奴隷を作るときに、よく似た魔法刻印を施します。

私が用いているのは、そうしたものとは異なり、心は縛らず、肉体を強化して、快感を増幅させるためのものです」

刻印を埋めこまれるたびに快感がほとばしり、全身が痙攣する。なにか言おうとするが、操り人形のように体を反応させることしかできなかった。

「はあっ、はあっ」

呼吸が荒くなり、全身が熱を帯びている。それだけでない。魔力がみなぎっている。コップに限界までためた水のように、肉体の枠を超えて魔力が膨れ上がっている。

「それでは注入します」

体験版

細いペニスがするりと入ってきた。ダンテの腕のように太い性器を挿入されたあとでは、細枝のようにか細く感じた。

キャスバは腰を振らずに液体を放出する。本当に、自分の体を、男性型注射器として用いているようだった。

体内に魔法薬が入ってくる。性器の周辺に塗られるだけでもあの効果だったのだ。その薬が、膣の奥、子宮の周辺にばらまかれる。

キャスバが私の腰の上、ちょうどペニスの先端がある場所に手を置いてきた。

「結晶化！」

魔法の呪文が唱えられた。その瞬間、体内で鋭い痛みが走った。

体験版

「あがっ……」
体の奥が、ぐずぐずと痛い。
体験したことはないが、ガラスの破片を大量に体内に詰め込まれたような苦しさだ。先ほどまで快感で痙攣していた体は、痛みで震えはじめた。
「魔法薬を結晶化して体内に埋めこみました。液体のままでは、すぐに流れ出てしまいますので。少し痛みがありますが、すぐに引きます。魔法薬の結晶から、少しずつ魔法薬が流れ出てきますので」
言われたように徐々に痛みが引いてきた。施術が終わったのか、キャスバは陰茎を引き抜いた。
私はようやく鈍くではあるが、思考できる状態になった。

体験版

「この魔法薬は、常に流れ出るのですか？」
新しい環境に対応できるように情報を集めようとする。ふだん生活しているときにも分泌されるのでは、思考の妨げになる。
「あなたは魔法を使えるのですよね。切り替えができるはずです」
キャスバはやり方を教えてくれた。どうやら彼は、人間の魔法体系にも精通しているようだ。
体内に魔力回路を形成して、オン、オフの魔力注入点を作る。オフの方に魔力を流しこむと、体の火照りが消えて呼吸が穏やかになった。
体を拘束していた湯船のお湯が、ただのお湯に戻った。私は立ち上がり、湯船から出て手足を動かしてみた。

体験版

力がみなぎっている。魔法刻印にわずかに魔力を流しこむと、途端に体の筋肉が柔らかく、しなやかに変化した。

「これで、ダンテ様との性交でも生き延びることができるでしょう」

「ありがとうございます」

「いえ、お礼はけっこうです。それよりも成すべきことを、ゆめゆめお忘れなく。

ダンテ様の子を宿し出産する。あなたはそのために買われたのです。それができないときは――」

命の保証はないということだろう。こればかりは自分の意思ではどうにもならない。

「魔族と人間のあいだでの妊娠率を高める術などはあるのです

体験版

か？」
少しでも生き延びる確率を高めたかった。
「高揚、悦楽、痴態。あなたが乱れれば乱れるほど、男性側の興奮は増大し、より精子の量と質が増します。理性を捨てた積極的な交合こそが望ましいものです。
そして、ダンテ様を可能な限り閨に誘ってください。回数が多いほど、妊娠の可能性は上がります」
私はうなずく。アドバイスのとおりに実践しようと思った。
「とりあえず、私の首もしばらくは繋がったままでいられそうで安心しています」
キャスバは笑みを浮かべた。
「どういうことですか？」

体験版

「私もあなたと、さほど立場は変わらないということですよ。配下に加えられたと言えば聞こえはよいですが、強制徴収です。そして使命を果たせなければ屠られる。魔界とは、そういう場所なのです」

背筋が冷えた。分かってはいたが、ここは過酷な場所なのだ。妊娠、出産。自分にその能力があることを願うしかなかった。

◆

食事が部屋に運ばれてきた。部屋の中で全てを済ますのかと思った。まあ、魔族の館を人間がうろつくのは避けた方がよいだろう。食料が歩いていると思い、うっかり食べる者もいるか

体験版

もしれない。
運んできたのは、私の世話係である男夢魔のキャスバだった。料理は、何の肉か分からないステーキと、肉と煮込んだ野菜だ。肉は人間の肉でないことを祈ろう。野菜はおそらく肉よりも高価だと思う。
魔界に売られたあと、檻の中で与えられた食料に野菜はなかった。魔族が農業をしているという話は聞かないから野山で採集したものだろう。館の周りにある葉が乏しい樹木を考えると、野菜が珍しいものだというのは容易に想像が付いた。
「野菜は、キャスバが調達したのですか？」
「はい。人間の体を維持するのには必要だと話して、集めさせました」

体験版

「さすが人体には詳しいのですね」
「そうですね、さまざまな実験や研究を重ねてきましたので」
実験や研究の中身については聞かないでおこう。
味付けは完璧だった。見栄えの面では劣っているが、味と栄養の面では十分な食事だと言えた。
「お口に合いましたか？」
「ええ、久し振りにまともな食事をたべることができました」
キャスバは笑みを浮かべる。
「ダンテ様との次の交合の予定は分かっているのですか？」
食事を終えた私は、今後の予定について尋ねた。
「今晩、こちらを訪れる予定です。ダンテ様にとっては、大切な公務ですので」

体験版

引っ掛かっていた点だ。おそらく人間の妻を娶ることは魔王から命じられている。そしてダンテ自身は、そのことを嫌がっておらず、真面目に遂行しようとしている。その理由が分からない。

理由を正しく知っておかなければ、打つべき手を誤って、死に直行する危険がある。しかしダンテは、その件については積極的に語ろうとしない。可能なら、キャスバから理由を聞き出しておきたかった。

「公務というのは、どういうことでしょうか？　粗相のないように詳細を伺っておきたいです」

キャスバは少し考えたあと口を開いた。

「それは、ダンテ様から直接伺った方がよいでしょう。あの方

体験版

にもお考えがあるでしょうし」
簡単には話してくれないか。
「ただ、あなたが一番知りたいであろうことにはお答えします。子供を宿しさえすれば、出産までは命を守られます。また私の方から、人間の血の入った子を育てるには、母親が必要だと伝えています。子供を無事に産みさえすれば、寿命をまっとうすることも難しくはないでしょう」
嘘を吐いているようには見えない。そしてこの男夢魔は、私と一蓮托生だと言っていた。おそらく本当のことを言っているのだろう。
「ダンテ様をお迎えするにあたっては、どのような準備をするのがよいですか？」

体験版

「服装は、魔族好みに黒を基調としたものがよいでしょう。クローゼットにいくつか服を用意しています。ご覧になりますか？」

私は首を縦に振る。

「どのような体型の方が来るか分かりませんでしたので、いくつかのサイズのドレスを準備しています。採寸をしていないのでぴったり体のラインに沿ったものではなく、腰の部分を布で縛るようにしています。

黒いレースのドレスに、黒い毛皮のショール、黒革のチョーカーなどいかがでしょうか？」

「ダンテ様の好みに沿いそうですか？」

「正直なところ分かりません。なにせあの方は浮いた噂がない

体験版

無骨な方ですから。いろいろと試して性癖を探っていく必要があるでしょう。先ほど申し上げましたのは、あくまでも魔族好みということでしかありません」

「ダンテ様は、過去に女性とは？」

「周囲の話を聞く限り、経験はないようですね。オークションハウスであなたの処女を散らしたのが、初めての性体験だと思います」

なるほど、多くの花を渡り歩くタイプではないということか。

◆

廊下から物音が聞こえてきた。何人かの足音が近づいてくる。

体験版

大きな足音と、控え目ないくつかの足音。ダンテが来たのだろうと推測する。

「いらしたようですね」

食事はすでに下げている。部屋にはキャスバが残り、魔界についての講義をしていた。

服はすでに着替えている。黒いレースのドレスに腰布、黒毛皮のショールに黒革のチョーカー。顔には夜空を思わせる銀をあしらった化粧をしている。

扉が開いた。ダンテが部屋に入ってきた。背後には、さまざまな動物の頭の召し使いたちがいる。彼らはダンテの入室を見届けたあと、廊下を去って行った。

「ダンテ様、お耳を」

体験版

ダンテは体を傾けてキャスバに耳を寄せる。
「ふむ」
なにか助言を授けたようだ。キャスバは扉を閉じて、部屋の隅に椅子を持っていき腰を下ろした。手にはペンとメモを持っている。閨の記録係といったところか。
「妻よ」
「リーリアとお呼びください」
「ふむ、リーリアよ」
「なんでしょうか？」
まずは、名前で呼ぶことを定着させたかった。生殖のための道具ではなく、人格を持った存在であると認識させておきたかった。

体験版

「魔法刻印を体の各所に打ったそうだな」
「はい。あと魔法薬の結晶を体内に埋めこみました」
「それでは遠慮はいらないか」
「いえ、人間はとにかく壊れやすいものです。あくまでも優しくあつかい、ご堪能いただければ」
「そうか」
ダンテには人間向けの性行為を身に付けさせる必要がある。また、前戯をふんだんにおこない、挿入から果てるまでの時間を短くさせたかった。
「ダンテ様、性器をお出しください」
私の腕ほどもある性器が、服から引きずり出される。私は背伸びをして両手で触れて、口を使って先端をしゃぶりはじめる。

体験版

貴族の娘のたしなみとして、一通りの性技は、絵と言葉で習っている。しかしこれまで実践する機会はなかった。

反応を窺いながら性器への愛撫を続ける。もどかしいのだろう。早く挿入したいといった素振りをダンテは見せた。

「床に仰向けに寝てください」

彼の体は人間用のベッドには大きすぎる。失礼かと思ったが、床に寝てもらうことにした。

ダンテは素直に従った。私は、口でペニスの先端をくわえて唾液を染みこませる。それと同時に、胸と腹で陰茎を優しく包みこんだ。

「人間の女というのは柔らかいのだな」

しみじみとダンテは言った。

体験版

「そうです。硬い皮膚や鱗を持っている魔族とは違います。爪で少し引っかくだけで肌は傷つき、内臓がこぼれます。軽く小突けば骨が折れ、叩けば血を吐き死んでしまいます。

人間の女を孕ませ、子を産ませるには、繊細に取りあつかう必要があります。だから、私のことを大事にあつかってくださいませ、旦那様」

横になったダンテをまたいで立ち上がり、ペニスの上で両脚を広げる。腰を下ろして亀頭の上に膣口を乗せた。ゆっくりと挿入していくと、前回よりも容易に肉棒を受け入れることができた。

魔法刻印と魔法薬の結晶が効いている。肉体の負担がなく、魔族のペニスを受け入れられている。

体験版

しかし、体を無理に押し広げているのは変わらない。下腹部が盛り上がっている。その先端に両手を添えて、優しくなでて性器の形を感じた。

「体は大丈夫なのか？」

いたわりの言葉がダンテから漏れた。

「心配してくださっているのですか？」

「ああ、妻だからな」

律儀な人だ。政略結婚をして、凡百の貴族の息子に嫁がされるよりも、はるかにましだと思った。魔族ではあるが好ましい相手だ。この男に好意を抱きはじめている自分がいた。

「愛しています、ダンテ様」

「愛とはなんだ？」

体験版

そうしたものを学ばず、これまで生きてきたのだろう。
「相手のことを求め、守りたいと思う心です」
ペニスを膣に収めたまま、魔族の四天王に人間の愛について語る。
「愛は、肉欲とは違うものなのか？」
「肉欲も愛の一部です。それとともに相手を守ろうとする心が愛には必要です」
「守りたいとは、具体的にどのような心持ちなのだ？」
「体の傷を防ぐ、心の傷を与えないようにする、望みへと向かう道筋で寄り添う杖になる、誤った道へと進むようなら叱責する、そうしたところでしょうか」
「ふむ」

体験版

ダンテは私の腰に両手を添える。太い指を腰骨にかけて、ペニスを奥までねじこんだ。

「かはっ」

心臓や肺が潰されて声が漏れる。逃げ場のない内部からの圧迫が体を変形させる。

しかし痛みはなかった。全身に快感の波が押し寄せてくる。魔法薬が体を柔らかくして変形に耐えるようにしている。体内の各所で発動した魔法刻印が、苦痛を快楽に変換して増幅し合っている。

「リーリアの話は、魔王様に似ている」

脳内で快感の火花が散る。許容範囲を超える刺激のせいで、思考が途切れ途切れになっている。

体験版

「半信半疑だったが、魔王様が見た予知夢は正しいのかもしれぬな」
魔王の予知夢――。大切な言葉が発せられたので、必死に脳に留めようとする。
「ひぎいっ！」
下から強烈に突かれた。先ほど食べた料理の半ばが逆流してあふれ出た。肺の空気が全部吐き出される。心臓が一瞬停止したように感じた。
「あるいは、おまえが産むのかもしれぬな。次代の魔王を」
白目をむき、意識が飛ぶ。
「人の体と心はもろい。あれほど聡明に話していたおまえが、このようなただの肉袋になるとは」

体験版

激しい突き上げが何度も下から繰り出される。私は、ふいごのように空気を吐くだけで、手足は胴体の添え物になっている。

「出すぞ」

腹の中で爆竹でも破裂したように下腹部が膨満した。

ペニスと膣のあいだから精液が漏れて、膨らみは徐々に小さくなっていった。

ダンテが私の腰から手を離した。倒れそうになったが、硬く太いペニスが貫いているために倒れることはできなかった。

「愛か。魔族にはない概念だが、それがこの先の魔族には必要なのかもしれぬな」

胴を握られ持ち上げられた。膣からずるりと男性器が抜けて、穴から盛大に精液があふれ出た。

体験版

「守りたいと思う心か」
ダンテは私の体を天井に向けて掲げる。
「キャスバよ。人間は愛情をどのように表現する？」
「接吻あるいは抱擁です。接吻とは、たがいの唇を重ねることです。抱擁とは相手を胸の内で優しく抱き締めることです。接吻と抱擁の二つを同時におこなうことも多いです」
ダンテは私を抱き締め、唇を重ねてきた。秀麗な顔だが、私より二倍ほど大きい。巨人と小人のようないびつさがあったが、ダンテが私のことを大切に思っていることは伝わってきた。
「リーリアよ。どうやら俺もおまえのことを愛しているようだ。子はなさねばならない。しかし、おまえの肉体のことも考えなければならない。俺はおまえを壊したくはない。

体験版

キャスバに、よい策を考えさせる。それまでは負担を強いることになるが耐えてくれ」

徐々に体の中に残っている快感が引いてきた。それにつれて思考も明瞭になってくる。聞くなら今だと思った。全てのはじまりを確かめておく必要があった。

「ダンテ様は、どのような使命を与えられたのですか？」

ダンテは胸の上に私を乗せたまま、ぽつぽつと語りはじめた。

「魔王様が予知夢を見たのだ。次代の魔王は、強い魔族と人間のあいだに産まれると。そこで魔王様は四人の四天王を集めて命じた。それぞれ人間の女を妻にして、子供を産ませて育てよと。

俺以外の四天王は、いずれも複数の妻を持っていた。その末

体験版

席に人間の女を加えるだけのことだった。しかし俺は違った。これまでに妻というものを持ったことはなかった。最初の妻が人間の女になる。それは大きな意味を持つ。

魔界の四天王の一人が、最初の妻として人間の女を迎えた。それがただの人間の女であっていいはずがない。プライドなどではない。権威の問題だ。

魔界では常に他人を引きずり下ろそうという輩がいる。そうした者たちに、安易な攻撃手段を与えるわけにはいかなかった。俺の配下たちに不利益が生じるからな。

こうした考えは、リーリアが言う愛に近い概念だろう。ふつうの魔族は持っていない。配下のことなど知ったことかという態度がふつうだ。

体験版

魔王様は俺に近い。次代の魔王の座を求めて、魔族の者たちが争うことをよしとしなかった。明確な後継者を決めて、無駄な血が流れないようにして引き継ぎたいと考えた。魔王様は言っていたよ。蹂躙されるのはいつも弱者だと。

俺は魔王様の願いを叶えたかった。そして、自分の配下たちの安全も守りたかった。だからオークションハウスに行き、これぞと思う人間の女を大金で競り落とした。この人間の女には、それだけの価値があったのだと、周囲に強く印象づけたかったからだ。

俺は、競り落とした相手が、リーリアでよかったと思っている」

ダンテの胸の上で抱かれている。その肌に指を這わせ、人間

体験版

とは違って分厚く頑強なことを確かめる。
「どうやら俺は、配下を、魔王様を、そしてリーリアのことを愛しているようだ。
俺はリーリアに、俺との子供を産んで欲しいと思っている。そしてその子が、魔王様や、俺や、リーリアの意思を受け継いだ魔王になってくれればいいと望んでいる」
ダンテの心からの願いを聞いた。この魔族は私に心を開き、本心を語ってくれた。
「私は、ダンテ様の杖になりたいです。寄り添い、助ける、ともがらとなりたいです」
優しく背中をなでられた。人間、魔族という違いは関係なく、この男は、ともに人生を歩める相手だと思った。

体験版

第3章　淫獄の魔女

体験版